

(平成29年12月21日)

第26回 赤松小三郎研究会のご報告

日時 : H29. 12. 19 (火) 18:30~20:30
場所 : 東京・文京シビックセンター 4F B会議室
出席者 : 17名

< 配布資料 >

- 資料—1 「薩摩藩の赤松小三郎に対する処遇について」 石川浩さん作成
- 資料—2 『赤松小三郎伝』の存在について 石川浩さん作成
- 資料—3 『天山師と小三郎先生』(山浦正嗣氏所蔵資料)について 滝澤進さん作成
- 資料—4 山浦正嗣氏所蔵資料「天山師と小三郎先生」 松澤修一郎 作
- 資料—5 「松平忠固公を語る講演会&トークセッション」参加報告 荻原貴さん
- 資料—6 松平忠固(忠優)とその時代背景 荻原貴さん

< 回覧資料 >

- ・ 阪本天山の「周発台」(大砲の砲架)の写真 沓掛忠さん
- ・ 明倫会講演会での配布史料 荻原貴さん

< 内容 >

1. 「薩摩藩の赤松小三郎に対する処遇について」 石川浩さん
 - ・ 薩摩藩側は小三郎を「借入れ中」と認識しているが、小三郎を薩摩藩に貸すことについて上田藩側にはなにも証文がない。
 - ・ 小三郎について、薩摩側に「招聘」、「招請」、「雇教師」という言葉を使った文書は存在するが、「登用」という言葉を使った文書は存在しない。
2. 「赤松小三郎伝」の存在 石川浩さん
 - ・ 東京大学史料編纂所の維新史料綱要データに「赤松小三郎伝」があるが、これは藤沢直枝編の「赤松小三郎先生」の内容を手書きで書写したものである。従って「赤松小三郎伝」は東京大学史料編纂所内での呼称である。(仏教大学青山忠正教授の見解)
3. 「天山師と小三郎先生」(山浦正嗣氏所蔵資料)について 滝澤進さん
 - ・ 山浦正嗣氏所蔵のこの史料は松澤修一郎氏(長野、鹿児島両県の交換教授に出張した長野側教育者)が昭和7年12月3日に書いたものである。
 - ・ 松澤修一郎氏が鹿児島出張の折り、鹿児島市史談会副会長の池田米男翁から

話しを聞き、まとめた。

- ・この史料については、これまでその概要が紹介されたことはあったが、所在を確認することができなかった。
- ・薩州が今日国内に独歩の地位を占めその令名を成す所以は、ひとえに信州の恩恵によるものである。
- ・1つは、高遠藩天山阪本先生の砲術の威力により文久年間国難累卵の危うきを脱れ、1つは、上田藩赤松小三郎先生の学徳により幕末藩士の養育に尽力せられ、以て明治時代に多くの功臣を送るの榮譽を得たことである。この2人がいなければ、今日の鹿児島はなかった。
- ・日露戦争後、東郷将軍ほかの赤松小三郎先生の門下生が鹿児島に帰り一堂に会したとき、皆期したるものの如く小三郎先生について語り、あの時は篠原国幹の箝口令に遭ったが、幕末明治にかけて薩藩が天下に雄飛し得たのも、ロシアを撃破できたのも、ひとえに赤松小三郎先生の薫育教化の賜に他ならないと、その徳を称えた。
- ・天山は直接、多くの薩摩藩士たちに砲術を教えたわけではない。青山五郎左衛門という薩摩藩士が、当時、鍋島藩の砲術指南役だった天山に長崎において教えを乞うた。

青山五郎左衛門は鹿児島へ帰り、息子の青山愚痴に伝授した。青山父子が薩摩藩士に砲術を広め、薩英戦争のときに実戦で威力を発揮した。「地下の天山よく英艦を走らす」と当時の薩摩人は言ったという。

- ・信州と薩摩とは、天山や小三郎以前から縁がある。源頼朝は、自分のもっとも信頼する惟宗忠久（後の島津忠久、薩摩藩主島津氏の祖となる）を、塩田庄の地頭に任命してこの地方一帯を支配させたのである。（沓掛さん）

4. 「松平忠固公を語る講演会&トークセッション」参加報告 荻原貴さん

- ・関良基氏の基調講演「明治維新神話の虚構を正し、松平忠固を再評価する」
 - ・「無能な幕府が朝廷の意向を無視し、米国の言いなりに開国した」という薩長史観の誤りを指摘し、老中松平忠固主導の開国を「違勅」と糾弾した尊王攘夷運動が日本の外交・貿易に損害を与えたことを、下関戦争を例に説明があった。
 - ・忠固主導で勅許なしで締結した日米修好通商条約は関税率20%であり、決して不平等条約ではなかった。
- ・尾崎行也氏の基調講演「松平文学校・明倫堂と上田藩～櫻井純蔵をめぐって～」
 - ・講演では櫻井純蔵を取り上げ、櫻井家略譜を基に、祖父の代からの上田藩及び明倫堂との関わりについて詳しい説明があった。櫻井純蔵は八木剛助と共に上田藩の兵制洋式化に貢献した人物で、赤松小三郎の兄（柔太郎）と交流があった関係で小三郎とも繋がりがあった。維新後は明治3年、宮内省に勤め、明治15年に宮内省大書記官になった。

・トークセッション

- ・本野敦彦氏による「一般人（上田人、学者ではなく）として驚いた史実」の講演があった。

(以下、トークセッションで語られたこと～抜粋)

- ・忠固は国元のことは家老に任せていたので、明倫堂には直接は関係していません。(尾崎氏)
- ・忠固は日米修好通商条約締結直後に老中を罷免され、翌年に急死（47歳）している。暗殺説もあるが、資料がない。
- ・当時、英国と違って覇権国でない米国と条約を結ぶことにより、米国を味方に付けたという見方が出来る。条約締結に際しては岩瀬忠震、井上清直という優秀な幕閣が交渉全権として対応した。(関良基氏)
- ・忠固の三女は須坂藩主堀直虎に嫁ぎ、直虎亡きあとは中沢家に再嫁している。
- ・忠固はなぜ歴史から埋もれているのか。(昨夢紀事では悪口ばかり。東大系の歴史学者が認めないとダメなのかもしれない) 史実に基づいた客観的論文を多く出す必要がある。(尾崎氏)

赤松小三郎研究会 事務局

小山平六（62期）

荻原 貴（79期）